

藤浪は同書の序文において「伝記と肖像とは車の両輪の如くである。両者相待ちて、始めてその人物を躍動せしめ、その風格を思慕せしむるに足るのである」と述べ、医学史研究における肖像画の重要性を説いている。医家肖像の蒐集に努めた藤浪は、その成果を集成し『医家先哲肖像集』を刊行した。藤浪に先行して呉秀三（日本医学史学会初代理事長）、富士川游（同学会第3代理事長）もまたさかんに先哲医家の肖像を蒐集し研究を行っている。

新刊の『杏雨書屋所蔵医家肖像集』には、杏雨書屋に所蔵される169名、201点の医家肖像がカラー印刷で影印収録されている。うち177点が藤浪剛一の旧蔵品で、昭和19年杏雨書屋に入架した。その多くを占める模写品は、藤浪が肖像画を蒐集する際に原画の入手が不可能なため専門画家に模写させたものである。他に武田長兵衛氏杏雨書屋旧蔵（2点）、武田薬品工業株式会社研究所旧蔵（5点）、佐伯理一郎旧蔵（3点）、藤田吉王旧蔵（7点）、坂本恒雄旧蔵（1点）、杉立義一旧蔵（6点）が収録されている。

本書の編集にあたっては、肖像画を掲載した医

家の伝記に加え、肖像画についての参考項目を設け、当該肖像画に関する編者らの知見を述べた。参考項目には〔揮毫年、原画・模写の区別等〕〔他所の存在等〕〔賛文・落款等〕〔参考文献〕〔医家先哲肖像集〕などの各項目がある。

このうち、〔揮毫年、原画・模写の区別等〕〔他所の存在等〕の項では、原画、模写で原画が子孫に伝存するもの、模写で原画が他家に伝存するもの、模写で原画が亡失または行方不明のもの、木像（人形）により画像が作成されたもの、書物から作成されたもの、もとは写真に由来するもの、などの区別や、他の所蔵先を記した。〔賛文・落款等〕の項では、肖像画に付されている賛文の翻字・訓読・語句の注、落款の翻字などを記した。〔参考文献〕の項では当該肖像画に関する参考文献を挙げた。当該画像が藤浪『医家先哲肖像集』に収録されている場合には〔医家先哲肖像集〕の項にその該当番号を記した。

本書が今後の医家肖像の資料として活用され、当該分野の調査研究がさらに進展することを期待したい。

（平成20年5月例会）

## 方伎雑誌の訳注研究

### 寺澤 捷年

『方伎雑誌』は幕末の名医・尾台榕堂（1799-1870）最晩年の著作で1871年に刊行されたものである。本研究で用いた底本は近世漢方医学書集成『尾台榕堂』（名著出版）に影印版で収録されている『方伎雑誌』であり、底本に於いて一文字頭出して記されている事項を順次「節」とした。

その内容は症例、医論、生薬の選品など多岐に亘るが、榕堂の学識は誠に深く、「古人曰く」として引用されている言葉の出典、また用いた丸散方、軟膏類の記述も今日の我々には理解出来ない。

そこで、『欽定四庫全書 電子版』（香港）、呉秀三・富士川 游の選集校訂『東洞全集』、松本

一男の『訓注・榕堂井観医言』などの著作を検索し、全ての不明箇所を明らかにした。北里研究所東洋医学総合研究所の小曾戸 洋氏にも多大な助力を得た。本研究は先人の偉大な業績なくしては為し得なかった。

榕堂の引用した文献は『春秋左氏伝』『論語』『中庸』『大学』『史記』『漢書』など多岐にわたるが、本研究ではその全ての出典と引用箇所を明らかにした。

最後まで残った不明箇所は開港によって横浜に渡来するようになった生薬・大黃の産地「大仏加里」であったが、これは『蛮語箋』（1848）によ

り Bucharie であることが判明し、ウズベキスタンのブハラであることを明らかにした。

榕堂の医学は古方派の祖と言われる吉益東洞、その弟子・岑少翁、次いで尾台浅嶽を経て榕堂に伝えられた。従ってその医療は純粋な古方派の立場に立っている。しかし、榕堂は、華岡青洲の『春林軒膏方』の軟膏類を活用し、金属尿道カテーテル、ガーゼ芯、ポンプ(太い注射筒)を臨床応用している。これらはカスパル流の外科学の知識に基づいている。これらの知識は隣町に居住していた外科医・富永晋斎によることが判明した。

すなわち漢方方剤を用いる場合には徹底して古方派の論理に則り、不足の部分はカスパル流の外科学の知識を活用するという立場で臨床実践をしていたことが明らかになった。

本書に収載されている臨床例は流行性の悪性熱性疾患、虚血性大腸炎、メラノーマ、食道癌、壊血病、梅毒性角膜炎、結核性腹膜炎、流注膿瘍、化膿性咽喉頭炎、肺結核と推測される数十の病症が記述されている。その記述の態度は極めて冷静であって、たとえば食道癌と推測される症例は不治であったが「後学の人が明らかにしてくれるであろうことを期待し、事実だけをここに記しておく」と詳細な臨床症状とその治療経過を客観的に記している。

榕堂は本書に先立ち『類聚方広義』(1856)を著している。これは吉益東洞の『類聚方』に自ら

の臨床経験に基づき頭注を付した著作であるが、この頭注には様々な丸剤・散剤の併用が記されている。しかし、これまでこれら丸散剤の詳細は不明なものが多数あった。今回の研究によって全ての内容と効能効果が明らかになったので、本研究は尾台榕堂の著作を理解する点でも大いに役立つものと考えている。

榕堂の没後の1874年、明治維新政府はドイツ医学をわが国の医学教育の模範とすることを決定し、以後、漢方は医学教育の場から排除された。しかし今日の高齢社会の出現を予測した武見太郎・日本医師会長の努力によって1976年から147種類の漢方エキス製剤が医療保険の適用を受けられることになった。しかし西洋医学とはパラダイムの異なる漢方の基本的な考え方を教育しなければ安全で有効な漢方薬の臨床応用は出来ない。

そこで、2001年全国医学部長会議は医学教育のカリキュラムの抜本的な見直しを行った。このコア・カリキュラムは2003年から実施されている。

これに伴い、様々な教科書が作成されているが、更に深く漢方の本質を学びたいという人材も輩出するようになってきている。その専門教育の教材として尾台榕堂の『類聚方広義』と今回研究の対象とした『方伎雑誌』は最適であると考えている。

(平成20年5月例会)